

石渕 聡氏 博士 (文学) 学位請求論文
論文題目 舞踊の意味を生成するものとしての身体』
審査報告要旨

本論文は、観客がなんらかの身体的動作を「舞踊という意味」をもつものとして見いだすメカニズムについての研究である。舞踊の意味というテーマは舞踊美学の中心であり、舞踊研究者なら誰でも一度は考えるテーマだが、問題の困難のためこれに正面から挑戦する者は多くはない。困難であるのは、舞踊の「意味」のあり方が多様であり、その構造が複雑をきわめるからである。その難題に石渕氏は舞踊の身体という仮説対象を立てて挑み、舞踊を生きる観客ならびにダンサーの視点から、舞踊の意味を生成するメカニズムを取り出そうとする。

そもそも「舞踊という意味」の生成メカニズムを分析するには、あらかじめ「舞踊」や「ダンサー」といったものがあることを前提するわけにはいかない。本論文では、そうした前提を排除する、現象学的「無前提性要求」がはじめに立てられる。その結果、「身体・動き・光・音・空間・装置などが一体となった舞踊という全体的・単一的あらわれ」が探究の場としてひらかれる（第一章）が、それに関して氏は三つの論点を取り出す。

舞踊における時間的分節（サルトル的脱自の構造）空間（メルロ＝ポンティ的な状況的空間性）はダンサーの動きによって成立する。この水平的関係に、「見せる」身体（サルトル的対自・対他存在）という垂直的關係がクロスする（第三章）。観者と演者の関係は、既存のメッセージモデルによってではなく、パフォーマンスモデルによって分節化され（第五章 § 1）この構造が、この後の分析の大枠となる。第 1 の論点においては特に、メルロ・ポンティの身体論を用いて、ダンサーの身体を「いまここに舞踊」という今まさに進行形の身体として捉え、サルトルの対自 身体から、ダンサーが身体の部位を知覚する構造を導き出し、世阿弥の唱えた「離見の見」の論理と結び付けるなど、ダンサーの視点からの身体論にユニークな発見が見られる。

舞踊身体 / 現実身体の違いは、「虚 / 実」（ランガー）「前反省的 / 反省的」（シーツ・ジョンストン）（第二章）といった仕方で従来とらえられていた。だが、現実身体と舞踊身体との位相転換は 動き によってなされる。しかも、この際、（ ）舞踊身体は、ラカンの鏡像段階論の枠組みに似た仕方で「引き受けられる」（第四章）。（ ）観者にとって現実身体から舞踊身体への位相転換は、目の前にある身体動作が、言語的分節化や既知の雛形に回収不可能であるがゆえに、通常の解釈回路が遮断されることによって起動される（第五章 § 2・第七章・第九章）。（ ）舞踊は、言語的解釈装置からの逸脱である（第八章）。（ ）回収不可能な動きは「雛形化」によって舞踊のカテゴリーに登録される（第九章）。

観客にとって、舞台の構成要素（身体・動き・光・音・空間・装置など）は、その都度相互転換可能な「媒体因」「内容因」の関係にあり、あるいは現象学的な「図 / 地」関係にある。図 / 地関係による知覚的分節・構造化の組み合わせにより、動きが前景に出たり、動体としての身体が前景に出たり、といった変化が可能になる（第六章）。

本論文では、現象学的・記号論的考察をもとにジャンル間の相違を取り出す端緒となる指摘もなされる。たとえば、同じく身体をもちいた芸術であるとはいっても、演劇のような虚構世界への視線の回付は舞踊においてはおこらず、逆に、虚構世界によって、通常のコンテキストではありえない身体性(「王子様」)を呈示することが、舞踊においては正当化されるといった指摘がそれである。

以上の考察をもとに、身体とは、あらかじめ実体として存するものではなく、むしろ、？ 振付家とダンサーの関係、？ ダンサーにおける舞踊身体＝動きの引き受け＝空間構成によるイリュージョンへの位相転換、？ 言語的・離解的節の逸脱、？ 観者における読みとり回路の転換、？ 劇場空間全体における図／地関係の交錯、？ 身体の引き受け、？ 反省的カテゴリー化、などの諸構造における 横断線 として機能する関係項であること、さらに、舞踊をみる という経験が、以上の諸構造を透視するまなざしの方向づけ(意味＝方向)として把握されることが明らかになる。

審査委員会において細かな点での疑問点が指摘された。分析の不徹底(離解が類型形成の受動的綜合によるとしても、それが日常的な類型形成に止まらず、舞踊カタログの豊富化につながるのはなぜか、など)、各々の論点相互のつながりの不徹底(サルトル的対自・対他存在とラカンの鏡像段階論、離解形成が 図／地 構造におよぼす影響など)、また、テーゼを裏付ける根拠不足(サルトル的対自存在が「舞踊そのものにまで広がる」という根拠)など。さらに、第三部の論述は、舞踊における記号論、コミュニケーション論の先行研究の批判的総括を経なければ説得力を持ち得ない。また、理論的考察に傾きすぎ、舞台の具体的ケーススタディーや例示が不十分である点も、舞踊学の論文としては問題であろう。

けれども、認識や行為に関して形成された現象学理論や、言語芸術に関する記号論的枠組みを、単純に舞踊に応用するのではなく、舞踊のあり方をふまえたうえで既存の枠組みを变形させ、舞踊にまつわる諸現象を整理するための理論的骨組みを素描した点は十分評価に値する。従来の舞踊理論が、身体や舞踊的動きに関する実証主義的態度にとらわれていることを考えれば、舞踊経験の繊細な諸事象を丹念に拾い集め、舞踊経験の構造から逆に身体や舞踊的動きを規定しようとした点は、最近の哲学における諸展開を十分にふまえたものと言え、その意味で画期的な論文である。

細かい点で疑問点は指摘されたが、それらは今後の研究活動の中で解決されるべきものであり、石淵氏は今後この分野の研究で多大な貢献をしていくものと思われる。

よって、本論文は、博士(文学)の学位を授与するに値するものと判断する。

2003年12月1日

主任審査委員	早稲田大学客員教授	片岡 康子
	早稲田大学教授	古井戸秀夫
	早稲田大学客員教授	国吉 和子
	学習院女子大学教授	尼ヶ崎 彬
	専修大学教授	貫 成人

